司書職採用試験合格体験記

文学部　日本文学専攻　4年
M.T

はじめに

私は国立大学法人等職員採用試験(図書)に合格し、来年度から筑波大学の図書館で働きます。試験対策を始めたのが遅かったことに加え、やはり司書職の正規採用は狭き門であり諦めそうになることもありました。周りのほとんどの友人が就活を終える中で、ここからが先の見えない戦いの始まりだという状況に焦り苦しんだ期間もありました。試行錯誤を繰り返しながらも晴れて合格を勝ち取った私の体験が誰かの役に立てばと思い執筆しています。

私の司書職採用試験受験の経緯

司書になりたいと明確に思い始めたのは大学3年生の夏頃でした。国立国会図書館の実習に参加させていただいたことがきっかけです。まずは国立国会図書館、それと同時に、いずれも定員は少なく狭き門を覚悟の上で大学図書館及び公共図書館も視野に入れ、自分が魅力を感じた図書館に司書として採用されることを目標としました。しかしその時点で国立国会図書館の試験まで1年を切っており、有識者の方や公務員予備校の方にもこの短期間では厳しいと言われ、就活浪人をして翌年再度挑戦することも念頭に入れ受験をすることにしました。

国立国会図書館の採用試験の後、今後の選択のために点数開示をしたところあと1点及ばずという結果を知り、悔しさとともに「もう間に合わない」と言われる状況であっても、残された時間で勉強の質と量を高めていけば合格の可能性は十分にあるのではないかと感じました。皆さんには、挑戦する前に諦めてはもったいない、周りや平均と比べ遅れを取っていたとしても、その時点からできる自分の最大限の努力を行っていくことが、狭き門を潜り抜けるために必要なのではないかと強くお伝えしたいと思っています。5月になり大学図書館や公共図書館の採用試験に切り替えなければならない頃は教育実習に卒業論文、普段の授業にも追われ、勉強不足で一次試験すら通過できないこともありました。大学4年生は意外と忙しいです。恐らくこれから挑戦する皆さんも、勉強時間の確保には苦労すると思います。

最終的に公共図書館5館と大学図書館等5館(国立大学法人等職員採用試験は一次の教養試験は全ての大学で共通ですが、面接からはそれぞれの大学に出願します)を受験しました。そして夏以降、いくつかの図書館から内定をいただくことができました。その中で筑波大学の図書館に決めた理由としては、「どの様な図書館で、どの様なサービスを提供したいか」という自分の理想に一番合っていたからです。就活を続ける中でこの理想像を軸として持っておくことは大切だと思います。

情報収集・出願について

公共図書館職員の募集は全ての図書館が毎年行う訳ではありません。数年に1度あるか否か、それも1-3人と僅かな採用人数であることが大抵です。そのため家の近くの図書館や以前から興味を持っていた図書館に出願すれば良いという訳では無い点が難しいところです。採用試験の情報は募集を行う図書館、自治体のホームページに掲載されますが、情報収集には司書職の採用情報がまとめられているサイトが便利です。以下の3つのサイトを使い、1週間に1度は情報を確認するようにしていま

した。

・図書館司書になる
(https://library-site.hatenablog.com/)
・こむいん
(https://comin.tank.jp/public_servant/librarian.html)
・図書館職員求人情報
(https://www.jla.or.jp/tabid/334/Default.aspx)

私は試験日程が重ならない限り、関東の募集は全てに出願しました。遠方の試験会場への連日の移動や異なる様式の試験対策はかなり大変でしたので、ある程度絞ることも手段の1つだと思います。ただ限られた採用枠を掴み取るためにも、自分の就活の条件に当てはまる所はできるだけ多く受験した方が良いのかもしれません。また受験を重ねるにつれ、時間配分や出題形式、試験そのものにも慣れることができました。

出願はパソコンでできるものがほとんどでした。名前や住所などの基本情報を入力すればよいだけの所もありましたが、志望動機等を書いたESの提出を求められる所も多かったため、出願締め切りに余裕をもって、事前に出願時の入力内容を確認しておくことをおすすめします。

筆記試験対策

一次・二次試験に筆記試験を課す図書館がほとんどです。その種類としては大きく分けて、一般教養、図書館情報学、SPI等のWEBテストの3つがありました。一般教養は公務員試験でよく耳にする「数的処理」「判断推理」「資料読解」「社会科学」「人文科学」「自然科学」といった科目の問題が出ます。WEBテストを導入する公共図書館が近年増えていると感じますが、未だ大多数の公共図書館が一般教養の試験を行っています。私は数的処理、判断推理を過去問集を使って重点的に対策し、科学科目は一問一答の冊子とアプリを使って足を引っ張らない程度に勉強しました。公務員予備校に通うことも考えましたが、一般的な公務員とは試験日程も科目も異なるため適したコースが無く、自学で進めました。

図書館情報学の試験は、基本的に国立国会図書館と大学図書館が二次試験で行うのみで、公共図書館ではあまり見られません。図書館情報学の問題集は『司書もん』3冊のみです。しかし『司書もん』には丁寧な解説が付けられており、更には自分でも問題に関連することを芋づる式に調べていくことで網羅的に知識を習得することができました。また『図書館情報学用語辞典』(丸善出版、2020)を読んでいたことも効果があったと思います。

面接対策

具体的な面接の様子や質問内容については、別途資料にまとめて司書課程室に置いてもらおうと考えているため省略し、今回は対策という観点から書きます。私が受験した図書館では全て事前に面接カードを記入し、その内容に沿って面接が進められました。まず出願の時点で、図書館について徹底的に調べました。ホームページはもちろんその図書館が提供しているデジタルアーカイブを実際に使ってみたり、公共図書館の場合は自治体の方針や特徴も確認したりしました。面接前に実際に図書館を利用しておくと、想定外の質問に対応する助けになります。大学図書館は一次試験合格者を対象に見学会を開催する所もあるため、積極的に参加した方が良いでしょう。質問内容は当然図書館によって様々でしたが、私は「その図書館の強み」、「改善すべきと思う課題」、「自分がその図書館で何をしたいか」の3点は常に用意していました。これらを考える時には、図書館統計や評価報告書等が役に立ちました。面接カードを書く際にはできるだけ端的に質問に対する答えを書き、実際の面接時に根拠となるエピソードや具体例を話せるよう準備するということを意識しました。その結果深堀してほしい部分を聞いてもらえることが増え、面接で焦ることが減りました。また印象に残る言葉選びも工夫していました。

おわりに

司書職採用試験は、情報も対策本も少なく不安を感じることが多いと思います。挑戦を続けていく中で失敗も成功も経験し、自分なりの攻略法を見つけていくことがコツなのだろうと1年を通して実感しました。これから司書を目指す皆さんが試行錯誤の末に、ご自身にとって最善の形で就職活動を終えられることを願っております。

最後に明治大学に通い司書職採用試験に挑戦しようと考えている皆さんに、おすすめの勉強場所をお伝えしたいと思います。それは駿河台キャンパス19階にある、司書課程室です。私は一時期は週5日、授業がある日は空きコマに、全休の日は一日中通っていました。図書館情報学にまつわる資料・書籍をすぐに閲覧することができ、タイミングが良ければ司書課程の先生に質問するチャンスがあったりと、司書職採用試験対策をする最高の勉強場所でした。事務の方やTAさんとのお話は勉強の息抜きになるだけではなく、最新の図書館の話題を知ることにも繋がり、大変お世話になりました。ぜひ活用してみてください。